

日本の若者の問題についての心理学的・社会学的考察： 日本における外国人研究者からの視点

トゥーッカ・トイボネン (日本学術振興会特別研究員、京都大学文学研究科)

Tuukka Toivonen

ビナイ・ノラサクンキット (日本学術振興会外国人研究員、ミネソタ州立大学心理学部/こころの未来研究センター)

Vinai Norasakkunkit

カール・カッセゴール (日本学術振興会特別研究員、イエテボリ大学・京都大学大学院文学研究科)

Carl Cassegard

マイケル・ジーレンジガー (ジャーナリスト、カリフォルニア大学バークレー校客員研究員)

Michael Zielenziger

内田由紀子 (こころの未来研究センター助教)

Yukiko Uchida

はじめに

内田由紀子

2010年6月12日に、ワークショップ「Psychological and Sociological Perspectives on Japanese Youth Issues: Views from Foreign Researchers in Japan (日本の若者の問題についての心理学的・社会学的考察：日本における外国人研究者からの視点)」が京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」とこころの未来研究センター「青年期の社会的適応プロジェクト」との共同で開催された。

このワークショップは、京都大学に滞在している3名の外国人研究者の興味・関心が共通していることから企画された。3名の専門領域は、心理学・社会学と異なっているが、それぞれが「日本の若者の問題」について関心を抱いていたのである。同じトピックに関心を持つ者が集まり互いの視点を知ることで、新たに見えてくるものはないだろうか。また、外国の研究者が現在の日本社会を考察したときに見えてくる視点とはいかなるものであろうか。さらには、ニートやひきこもりなどの、今日の若者が抱える問題はどのよう

な枠組みで理解し、支援をすすめるべきなのだろうか。

ワークショップは文学研究科のトゥーッカ・トイボネン氏、こころの未来研究センターのビナイ・ノラサクンキット氏、カール・カッセゴール氏の3名の講演と、『ひきこもりの国』(光文社)の著者であり、日本の若者の問題に詳しい著名なジャーナリストのマイケル・ジーレンジガー氏をメインコメンテーターに迎えて開催された。社会学者のトゥーッカ氏の話題提供には社会心理学・文化心理学を専門とする内田由紀子・こころの未来研究センター助教が、心理学者のノラサクンキット氏の話題提供には社会学者である太郎丸博・京都大学文学研究科准教授が、社会学者のカッセゴール氏の話題提供には発達心理学者の近藤恵・こころの未来研究センター研究員がそれぞれコメントを行うなど、社会学と心理学の相互の連携を模索する会となった。日本の若者の問題に関心のある学内外の研究者が参加し、活発な議論が行われた。本稿では、各氏の話題提供とジーレンジガー氏の指定討論での発言の要約を掲載する。

話題提供 1

若者問題は どう生み出されるのか？

トゥーッカ・トイボネン

今日は、若者そのものではなく、「若者の問題」の性質について考えてみたいと思います^{*1}。学術的分析においてさえ隠されていることが多い日本の若者の問題の成り立ちには、重要なロジックが存在します。このロジックを説き明かすための1つの方法は、次のように質問してみることです。例えば、「ひきこもり」という言葉はどのようにして広く関心を集めるようになったのか？ そのさまざまな定義はどのようにして生まれたのか？ ニートについては？ われわれはこうした問題とその「フレーム」を所与のものとしてそのまま受け入れるべきか？

若者の問題は「現実」の正確な描写ではないし、また正確な描写になりえないというのが私の立場です。むしろ、「公的な論争の場において、社会が『問題』であると見なした、『若者』を取り巻く推定上の状態」と定義することができます。社会が、ある状態を「問題」とすると認識す

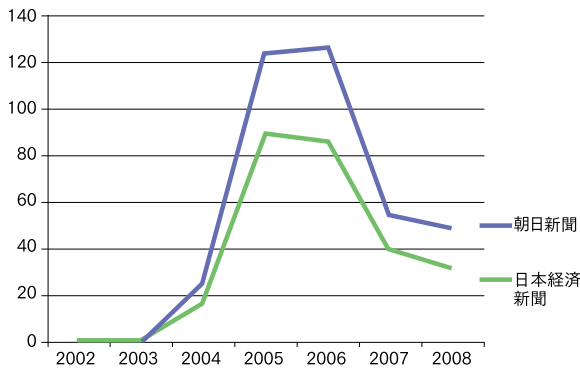


図1 「若者問題ウェーブ」の例

「ニート」について取り上げた年間記事数(朝日新聞、日本経済新聞、2002～2008年)

注:「NEET」か「ニート」のいずれか(もしくは両方)の表記を含む

るプロセスこそが若者問題を規定します。この理解に基づいて、私は現在の日本の文脈において、若者の問題が提起され、定義され、評価され、そして論争の対象となっている方法を形づくっている5つの「若者問題メカニズム」を紹介します。

「若者問題ウェーブ」

若者問題ウェーブ(youth problem waves)というコンセプトにより、全体像、すなわち特定の問題が生じてくるタイミングとその進化変遷を見ることができます。図1は、2002年から2008年までの朝日新聞と日本経済新聞にニート(NEET)という用語が含まれている年間記事数を示しています。これにより、2005年から2006年にかけて、この問題が特に強調され、「ニートウェーブ」として現れていることがわかります。この期間に起こったのは、われわれが初めてこの「問題」に気づいたということばかりでなく、それを特定の枠組み(「怠け者で、やる気がなく、自分自身の無気力に責任があるニート」として理解したということです。また、2つの新しい若者支援対策が2005年から2006年にかけて実施されましたが、これは若者の問題と政策の間の緊密な結び付きを示しています。

若者問題を囲む「業界」

これらのウェーブ(高まり)は一種の「業界」(すなわち、新しいト

ピックのまわりにフレキシブルに集まってくる組織、ネットワーク、個人のゆるいグループ)を生み出しつつあり、現在、その最大のものの1つが「婚活業界」です。そして、この「業界」は若者問題の論争を強化し、持続させています。(エキスパート、

学者、若者支援リーダーなどを含む)「専門家」グループ、その他の法人が特定の問題をめぐって生まれており、その問題の定義や意味合いを変えたり、そこから何らかの利益を引き出したりしています。親のグループはしばしば特定の若者問題をメディアに取り上げさせています。政策立案者や政府は一般に目立たないものの、強力な役割を演じています。これらのいわゆる「アクター」は相互にコミュニケーションしたり、業界外のアクターに圧力を加えたりしています。

皮肉なことに、若者自身は、若者問題「業界」の活発な役割を担っておらず、いわゆる声なきグループ(muted group)にすぎません。「大人」(親、メディア、あるいは政府)は彼らと語るのではなく、彼らについて語っているにすぎません。当事者(ニート、あるいはひきこもりと見なされる人など)であれ、その他の関係する若者であれ、彼らは一般に若者問題のシンポジウムや政策論争において声を上げることはほとんどありません。

クレイム(申し立て)する人々・人た(claims-makers)

玄田有史氏、斎藤環氏、稲村博氏のような著名人を含む、所与の「問題」を訴える強力な人々から声があがっていることはよく知られています。彼らが分析する若者の問題は例

外なく常に「悪化」している傾向にあると主張されます。「問題あるグループ」が膨張し、社会秩序に対する脅威となっていると指摘されがちです。説得力のある証拠を示すために、クレームメーカーは非常にありきたりなやり方で調査を実施し、次のように主張します、「このグループを見よ、2002年から2005年にかけて50%、その規模が拡大している。今後10年のうちに何か手を打たなければ、今の2倍に拡大しかねない」。しかし、注意深く見れば、これらの推定上の増加は定義の方法によって説明できる場合が多いのです。さらに、一般にクレームメーカーの主張においては、社会的規範から若者が何らかの面で逸脱していることが強調されます。特定の若者が中産階級の基準に合わない(登校拒否は学校を避ける、ニートは仕事を拒否するなど)こと、それゆえ「ふさわしい青少年・社会人」ではないことを指摘しています。主なアクターやメディアはこのような挑発的戦術を活用しています。

職業間の綱引き

この用語は、若者の問題は一般に、自分自身の方略を売り込むために、「問題」に対する自分自身の見解を押し出すさまざまな「専門家」グループ(たとえば若者更正支援者、臨床心理学者、医師、学者など)の間で衝突の場になるという事実を指しています。米山尚子氏によると、この衝突を表す2つの主な言説は、「医学的言説」と「行動的言説」です。医学的言説は、基本的に若者は病んでおり、医学的または精神的治療が必要であると言います。主なアクターには、医師、心理学者、政府の一部、医薬品会社が含まれます。これに対し、メディアにおいて支配的な行動的言説は、若者が社会的な規範に従って行動していないことを批判します。この言説は明らかに強力な世代的要素を持っています。つまり

彼らの基準に従っていないといって若い世代を批判するのは古い世代です。パラサイトシングルに対する批判などはその非常によい例です。活動家や若者支援者は、医学的および行動的パラダイムの両方に抵抗する傾向があります。

中流階級バイアス

若者の問題に関する研究の蓄積により、若者問題とは中産階級の、中産階級による、そして中産階級のための問題であることが確認されています。ここでいう「中産階級の」とは、問題に強い関心を持っているのは中産階級であるという意味です。「中産階級による」とは、主に親の階層を指しています。人脈が広く積極的な中産階級の親は若者の問題に対する主な駆動力です。彼らは支援グループやプレッシャー団体を形成します。「中産階級のため」とは、若者の問題の論争から生まれる政策が中産階級の若者を対象としたものになるという意味です。新しい政策が確立されても、それは非常に高価であるか、間接的に中産階級の子どもをターゲットにしているのか、貧しい若者や親と一緒に住んでいない者はほとんどメリットを享受できません。困ったことには、最も「排除される」または「メリットを享受することのない」グループは、そもそも若者問題の定義そのものから排除され、メディアでの論争にも現れず、その存在さえも忘れられます。

結論

以上、私は社会的構築主義の視点から若者問題の成り立ちについて取り上げました。そしてそうした問題の下にある社会的メカニズムに光を当てようとしてきました。なぜなら、こうしたメカニズムを知ることによって、われわれは自分自身の研究プロジェクトにおける微細な、しかし重要なバイアスを乗り越えることができるからです。したがって、例えば、「高いリスクを抱えている」若

者 (at-risk youth) を取り上げる際、実際に誰が一番危険に直面しているのかについて当然視されている想定を、批判的に評価することができます。すなわち、われわれはどのような階層を想定しているのか？ フリーターはニートやホームレスの若者よりも「リスク」があるのか？ さらに細かく分類することが必要か？あるいはむしろ、さまざまなカテゴリー間の境界を壊すことが必要か？

最後に、次のように聞きたいと思えます。政策プロセスで実際に声を上げる場合、若者が自分自身のことについて「問題」として取り上げるのでしょうか？若者が政策プロセスに完全に含まれているとしたら、「ニート」や「ひきこもり」のようなカテゴリーをわれわれは持つのでしょうか？私は政治学者ではありませんが、若者の政治参加や政治的影響力に強い関心があります。こうした課題について再び議論できる機会があればと思います。

*1 ここでは、著者個人の研究とともに、『日本の若者の社会学』(Goodman, Imoto & Toivonen) という暫定タイトルで出版を予定している共著に基づいてお話しする。本稿の詳細版は、著者のホームページ <http://users.ox.ac.uk/~grec1254/> から入手できる。

話題提供 2

ポスト経済産業時代の アノミーの心理的影響： 日本の若者の自己や 動機付けにおける考察

ビナイ・ノラサクンキット

私は、ひきこもりなどのリスクのある若者と就労・教育においてうまくいっている若者の間の相違を見るための実験的証拠と調査証拠を紹介したいと思います。また、リスク因子としての家族におけるダイナミクスの問題を取り上げます。

マーカスと北山の理論 (Markus & Kitayama, 1991) によれば、個人的目標を優先する社会は、自己が相対的

に他者や環境から区別される「独立的自己観」を発展させる傾向があります。そして、東アジアなどグループ志向の目標を発展させる社会は、他者や状況に依存した「相互協調的自己観」を発展させる傾向があります。相互独立的自己観では、自己を他人と区別し、自己のポジティブな側面を強調する傾向があります。これは自己高揚動機と呼ばれます。

これに対し、相互協調的自己観では、人々は社会的調和を維持しようとし、自己を状況や基準そして関係に合わせようとします。したがって、個人的行動と社会的に期待される行動の間のギャップを縮めるために、自分自身の欠点に注意を払い、その欠点を直そうとします。これを自己向上動機と呼びます。

相互協調的自己観において焦点が当てられている自己向上動機では、自己にかなりの可塑性があることが想定されています。なぜなら自己は社会的状況に調和するために柔軟でなければならないからです。これに対して相互独立的自己観において優勢な自己高揚動機では、個性的でポジティブ、他の人々とは違う自己の不変の性質に焦点が当てられます。

人々が成功と失敗のフィードバックにどのように対応するかについて、このモデルを適用して考えてみると、平均的日本人はより相互協調的自己観を持っているため、自己は可塑性が高いと想定され、失敗した後にはいっそう努力すると考えられます。なぜなら、他者にあわせて社会的調和を保てるように自分の欠点を直すこと (= 自己向上) に力を入れるからです。また、このパターンは相互独立的自己観においては逆になると想定されます。

先行研究において、ハイネらのグループは2つの条件を日本人と北米人にランダムに割り当てた実験を行いました。1つの条件では、参加者は非常に難しい課題を行い、失敗し

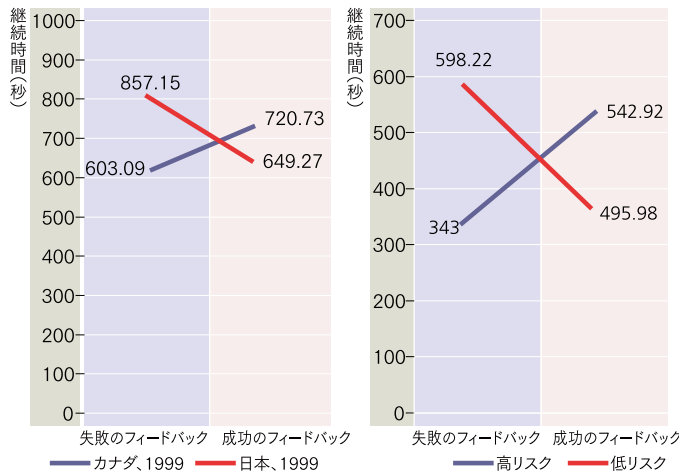


図2 失敗のフィードバックと成功のフィードバック
比較文化研究(左)と今回の研究データ(右)

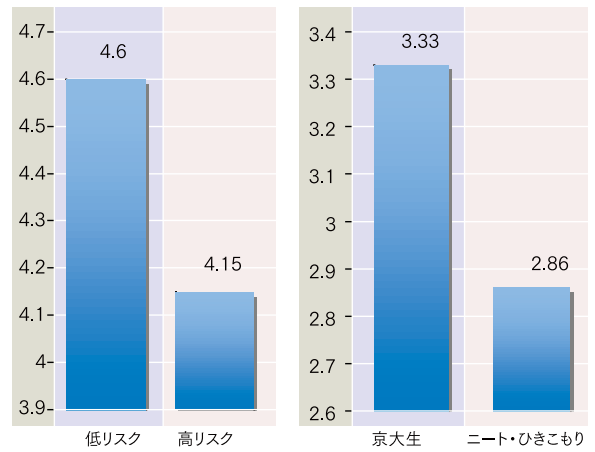


図3 相互協調の平均値

図4 適応能力に対する自己意識の平均値

たというフィードバック (=自分の成績は平均の下の方である) を受け取り、もう1つの条件では、参加者は相対的にやさしい課題を行い、成功のフィードバック (=自分の成績は平均より上の方である) を受け取りました。成功または失敗のフィードバックを受け取った後、彼らは同じような課題を遂行するように求められ、その課題への持続時間が測定されました。

予測どおり、日本人は失敗のフィードバックを受け取ると、成功のフィードバックを受け取ったときよりもその課題を長い時間継続して行いました。北米人の場合はその逆でした (図2左)。

心理的傾向における文化差を示すこのような調査は文化心理研究では一般的なものです。しかし、文化心理学と社会心理学における制限の1つは、われわれは常に社会の中心、すなわちその社会で適応的であり、それゆえ社会の中心的な心理的傾向を内部化している人からサンプリングする傾向があるということです。そのようにすると、文化の動的側面を理解することは困難です。

文化が変化していると想定する場合、社会環境の変化により、ますます多数の人が社会の中心から社会の周辺に移動しているということになります。われわれは、ニートやひき

こもりはこうした人たちを表しており、文化的変化や心理的傾向へのグローバル化の影響を捉えるには、こうしたグループについて検討する必要がありますと考えました。

ニートとは彼らが社会に完全には参加しておらず、それゆえ日本社会の文化的習慣や日常に適合できないことを示していると考えられます。言い換えれば、彼らは日本における中心的な心理的傾向からより逸脱している可能性があります。したがって、彼らは相互協調的自己観も低いと考えられます。相互協調性が低い結果、彼らは自己の可塑性も低いと考えていると思われる。すなわち、彼らの動機付けのパターンは、一般的な日本人のものよりも北米人のものに似ているということが予測されます。この仮定をテストするために、われわれはニート傾向において高いリスクを持つ学生と低いリスクを持つ学生でハイネの研究を追試する研究を行いました。学生はわれわれが開発したニート/ひきこもりリスク尺度に従って高リスク群と低リスク群に分類されました。また、相互独立的・相互協調的自己観の程度なども測定されました。

予測どおり、高リスク群は低リスク群よりも相互協調性がかなり低いことが示されました (図3)。

また、予測どおり、難しい課題

における持続性に関して、低リスク群は成功のフィードバックよりも失敗のフィードバックを受け取った際により持続的に取り組むことがわかりました。それは自分自身の欠点に注意を向けること、その問題に対する自己の能力に可塑性を想定してさらに向上するよう努力することが動機づけされていることを示しています。他方、高リスク群は、北米人のように失敗のフィードバックよりも成功のフィードバックを受け取ったときのほうがより持続的でした。それは自分の欠点に注目して自分を変化させるのではなく、固定的な自己のポジティブな側面を強化することに動機づけられていることを示していました。こうした結果は、高リスク群の学生は典型的な日本人のパターンとは対照的に、マイナスのフィードバックよりもプラスのフィードバックによって動機付けられ、より可塑性が低い自己観を持っているというわれわれの仮説を裏付けています。この相違は高リスク群は低リスク群よりも相互協調性が低いためであり、必ずしも彼らが相互独立性が高いということを意味していないと考えております。

2番目の調査において、われわれは大学生とNPOから集めた28人のニート・ひきこもり状態にある人たちの比較を行い、彼らがパーソナリ

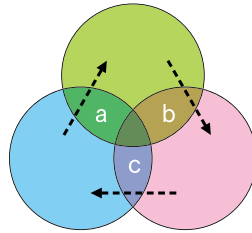
ティの性質をどれだけ可塑性があると考えているかを測定しました。たとえば、努力は実際にどの程度人の中心的な性質を変えることができると思うかなどを尋ねました。予測どおり、学生は、パーソナリティをより可塑性が高いと考え、ニートはパーソナリティをより固定したものと考えていました(図4)。これは先の動機付けに関する実験結果で分かったことと一致しています。

また、リスク因子としての家族関係にも関心があるため、親や仲間によって受け入れられていると感じている度合いを測定しました。

こうした測定から得られたデータを統計的に解析し、リスクの因果関係を調べました。このモデルは、ひきこもりタイプのニートとフリータータイプのニートには相違があることを示唆していました。主にNPOで支援を受けているのはひきこもりタイプであり、低い自己評価がリスクの強い因子となっていました。低い自己評価はポジティブな家族関係を持たないこととも結び付いているようです。驚くべきことに、仲間からの受け入れのレベルはリスク因子としては現れてきませんでした。

結論として、高リスク群の学生とニート／ひきこもりの間での動機付けのパターンは、日本の若者が自分を定義する上での文化的変化を表していると言えます。ひきこもり・ニートのリスクが高い人たち、または実際にそのような状態にある人たちは、相互協調的自己観や、懸命に働こうという動機に影響する要因(この場合は自己の可塑性に対する信念)を拒否しているといえます。ニートやひきこもりの動機付けパターンや態度は、現在日本人の間に広まっている傾向の極端な例を表しているのではないのでしょうか。家族の要因は、ひきこもりは家族がうまく立ちゆかなくなることから生まれたことを示唆し、これがフリータータイ

B 自然としての近代性(プライバシーへのひきこもり)



A ショックとしての近代性 (威圧的なシステムとしての社会) C 歴史としての近代性 (オルタナティブ空間)

遊戯は従属的なグループの強化にどのように貢献するか。強化が起こるためには、オルタナティブ空間が関係性での遊戯的な相互作用のためのエリアを開くだけでは十分ではない。必要なことは、遊戯的な態度が、こうした空間から広い社会へ広がり、遊戯がcへと転置されるための行動の自由が提供されることである。

図5 オルタナティブ空間と3つの概念

プのニートと区別される要因です。こうしたリスクを持つ家族が増えつつあるという事実は、おそらく社会や文化レベルでの構造的な変化と関係があるのではないのでしょうか。

話題提供 3

遊技とエンパワーメント：社会活動におけるオルタナティブ空間の役割

カール・カッセゴール

本日、私は無力感への対抗、権限付与(エンパワーメント)、政治的アクターとしての人々の自信強化を行うような社会運動としてのオルタナティブ空間の役割を取り上げます。この問題に対する私の関心は、登校拒否者、ニート、ひきこもり、またはフリーターなどのさまざまなサバルタン(下位)なグループの問題に対応するさまざまな運動の現在の動向にあります。

オルタナティブ空間は、まわりの社会の知覚の様式によって特徴づけられます。ベンヤミンが開発した3つの概念——ショック、自然、歴史によってこの点が明確にされます(図5)。「自然」とは、運命によって与えられ規定されるものとして人々が経験するものです。「歴史」とは、人間の行動によって作成される変更可能なものすべてです。しかし、ベンヤミンにとって、近代の特徴的な経験はショックです。ショックとは、人間が歴史の可能性において自

分の信念を失うときに感ずる痛みです。

ショッキングな敗北と自然に対峙することへのあきらめが、近代に関するベンヤミンの見解を特徴づけるものです。しかし、社会運動が「独立系のカフェ」、サロン、音楽シーン、サークル、または「フリースペース」を確立すると、それはしばしば「歴史」の感覚を蘇らせ、社会の圧倒的な力が剥がれ落ちるような空間を意識的に作り出すこととなります。

オルタナティブ空間が無力感という感情に対抗するには、3つの課題を解決しなければなりません。第1に、それまで従属的であった人たちが、もはや従属的ではなくなるような場所を提供しなければなりません。第2は、こうしたオルタナティブな空間自身の強化と拡張です。第3に、人々が社会において確立した秩序に対決しており、社会的変化のために働いていると感じさせることです。

オルタナティブ空間において繰り返し発生する問題は、抽象的でも具体的でもある相互作用の形式をいかにして作成するかであります。抽象とは、ある人が所与の社会的現実の1つまたは複数の面を体系的に無視するプロセスを指しています。具体とは、かかる面が再度呼び起こされ、相互作用を導くのに使われるプロセスです。下位の者が他と対等に参加できる空間を作成するのに抽象が必要である場合、具体は社会に変

化をもたらすためにまさに必要なものとして現れます。問題は、抽象と具体の間での調和のとれたシフトはどのようにして行われるのかということです。人々の再生を促進するためにあまりに多くのエネルギーが抽象空間を提供する課題に費やされる場合、社会的変化の願望は背景に押し戻される危険があります。逆にまわりの社会に対決するという課題が過度に強調される場合、活動家以外の者の参加が難しくなるかもしれません。最後にオルタナティブ空間自身の強化にあまりに多くのエネルギーが費やされる場合、下位ばかりでなく広い社会の公的エリアとの結び付きが衰える恐れがあります。

運動や運動のネットワークがこの困難とどのように関係しうるかを示すために、日本の3つの現代的運動を取り上げます。

NAM (New Associationist Movement) は、「資本、民族、国家への抵抗」のための運動を形成するために柄谷行人氏によって2000年に設立されましたが、3年後に組織は解散しました。その短い期間に、NAMはその最大のエネルギーをオルタナティブ空間自身の発展に、特にオルタナティブ経済の発展に注ぎました。これに対して、周辺グループの参加はほとんど重視されず、公的対決や抗議はまったく省みられませんでした。

次の運動は、千葉のニュースタートと富田のニュースタート関西（それぞれ1993年と1998年に設立）を中心とするネットワークに基づいています。どちらも、その主要な目的としてニートとひきこもりの支援を持っています。このビジョンの核は効率、利益、成長に対する要求を低減するような、「スロー」という理想を持つ社会の実現です。言い換えれば、活動の目的は既存の社会への人々の再適合ではなく、よりよい社会のために働くことです。

これら2つの組織のどちらも公的対決を行うことはなく、オルタナティブ空間の3つの課題のうち、「従属者の支援またオルタナティブ生活の舞台構築」が最も強調されました。支援活動が「もう1つの働きかた」の政治的ビジョンと結合されるということは、特にニュースタート関西の場合において活動家とその支援を受けている若者たちの間に明確な違いを見えるということです。言い換えれば、オルタナティブな社会に関する運動のビジョンと、従属者の回復に貢献するというより直接的な目標の間に「ギャップ」があるということです。

2004年から、東京や日本の大都市の通りは新しい種類のメーデーデモの光景、ストリートパーティを提供しています。デモ参加者はほとんどが定職を持たない若い男女、すなわちフリーターです。デモ参加者は自分たちを「プレカリアート」（非正規雇用者および失業者など、不安定な雇用・労働状況下にある人たちの総称）と呼びました。

プレカリティ運動（プレカリアートによる労働運動）は、従属的なグループの公的場面への参加を促す面では成功したところもあります。ひきこもりや障害者ばかりでなくニートもデモに参加しました。「場所」も重要な役割を果たします。これは、高円寺の「素人の乱」の中核となっている多数のグループに明らかです。彼らは「通り」を、芸術的ハプニングを思い起こさせるヒューモリスティックで、時には粗野な悪ふざけのためのシーンとして使っています。その場合、「通り」そのものがオルタナティブな空間になることが可能でしょうか？ すなわち、遊戯形態が「通り」に持ち出され、「対決」そのものが遊戯の特徴として想定されているかということです。

私を取り上げた3つの運動のうちで、オルタナティブ空間の3つの課

題を結合する努力を見て取れるのは、プレカリアート運動です。なぜでしょうか？

遊戯形態が社会的現実からの抽象を前提としているという考えは、遊戯の一般的な定義、すなわち「現実」から切り離された活動であることと一致しています。しかしこの定義が問題にされる必要があります。なぜなら遊戯は社会的現実からの区別においてのみ展開できるというならば、現実との対決においてどのようにして成長が可能になるのでしょうか？

この問題は次の問題と関連しています。プレカリアート運動のストリートパーティで実施されるふざけた対決でわれわれが見るものは、抽象的あるいは具体的相互作用として分類されなければならないのでしょうか？

具体と抽象がそれぞれ、所与の社会的現実が注意されているかどうかということによって定義されたということをおもひ起こしましょう。したがってそれらの間の対決を相対化する可能性は、この所与の現実が固定の外観を失った場合に現れます。これはまさしく歴史が再出現するときに行われることです。

遊戯はどのようにして社会との対決を可能にしているのでしょうか。遊戯はしばしば言われているような現実の反対にあるものではなく、無力感の反対にあるものです。遊戯は現実との分離を想定している「見せかけ」の活動としてではなく、まわりの環境に対する楽しい相互的な応答と見なされなければなりません。こうした広い定義は、遊戯が権限付与にどのように貢献しうるかを理解するのに役立ちます。オルタナティブ空間が楽しい相互作用のためのエリアを開くだけでは十分ではありません。必要なことは、これらの空間から広い社会へと広がる楽しい態度のためのチャンネルが開かれること

です。

指定討論

マイケル・ジーレンジガー

京都大学こころの未来研究センターにより、この複雑な問題について、外国人や日本人が相互に対話する機会が提供されたことに感謝します。社会科学やジャーナリズムで働いているわれわれは、「臭いものに蓋をする」、あるいは明確な問題についても語らない傾向を日本人が持っていることを知っています。以前、コミュニケーションが不足しているという家族問題が、家庭内でさえあまり取り上げられないという事実が指摘されました。これは、公開性全体が非常に問題となっているこの社会において、心理学および社会科学研究を行うことへの主な障害になっています。したがって、こころの未来研究センターが着手した仕事に感謝し、ここから野心的な計画が生まれることを希望します。

近代日本の非常に複雑な現実について新しい理解をもたらすために、まずはボトムアップ研究（フィールドワークとも呼ばれる）からはじめ、モデル、関連性、理論を見つけないと思いません。そこで重要になる示唆的な観点として、私自身は、日本社会は他の社会とは、特に西欧の社会とは、非常に異なっていると考えています。

私の著書『ひきこもりの国』(図6)での基本的議論は、私が調査した「ひきこもり」のような社会的障害や、特に日本的な機能障害は、ここ1、2年の景気悪化の後ではなく、この10年から12年の経済停滞の後に目立つようになったということです。日本でバブルが崩壊してから20年以上が経過しており、現在の大学生は日本経済が活況を呈していた時代の記憶を持っていません。

かつて日本のすべての人が豊かに

なっていたとき、社会的機能障害、あるいは不幸せを訴える人々や、社会の中での危機感を持つ人たちについて調査する理由はほとんど見あたりませんでした。結局のところ、私たちは皆が豊かになりつつあり、社会的成功が明らかであるかのようでした。人々は不幸であったかもしれませんが、飲み屋のつけを払うことができました。したがって、誰もがとにかく基本的にはなんとかやっていけました。しかし現在では事態はまったく異なっています。

ひきこもりは日本における多くの深刻な問題を理解するために重要であると考えて、私は本を書きました。自殺率の上昇から、女性子どもを持つことを拒否すること、そして結婚して子どもを持つことを自らの意志で拒否した女性であるパラサイトシングルまで。これらはみな、無理にでも総意を保とうとする社会から「抜け出よう」とする表現です。

私のアプローチは非常に共感的です。ひきこもりとは何であるかに関して基本的に2つの見方があると指摘してくれたのはトゥーッカ氏でした。1つの見方は、「医療的見解」と呼ばれるものであり、ひきこもりとは精神的疾患であり、よくなるには薬や集中的な医療行為が必要であるというものです。もう1つの見解は、「社会的」説明であり、基本的に彼らは怠け者であり、わがままな子どもであり、仕事に押しやるには背中をどやして追い出す必要があるというものです。これらは2つの極論です。

長時間ひきこもりの人たちと話をし、私はひきこもりとは何であるかを理解するための第3の方法があるのではないかと感じました。いじめへの恐怖や世間体のために、日本の社会では自分の真の自己を表すことができないと感じている彼らは、高度に知的で過度に共感的そして情緒的であり、ひきこもることで個人



図6 ジーレンジガー『ひきこもりの国』(光文社)

の抗議を表しています。彼らは自分がどのように振る舞うべきかについて他の人に合わせなければならないと感じています。その課題は非常に難しいため、活力を失い、そのため彼らを「真の自己」以外のものにしてようとしている外界に対処するのではなく、自分の部屋に閉じこもります。

重要なことは「個性化」のこの感覚であり、この一種の「自己強化」は日本における21世紀的なコンセプトです。本日のプレゼンテーションについての包括的なコメントがあるとしたら、それは現在の心理学的・経済的問題が表面化した理由は、一定期間問題なく動いていた古いシステムがもはや機能しなくなったということです。古いシステムは、若い日本人がよく知るグローバル化からもたらされたさまざまなモデルによって、異議を申し立てられています。そしてそれらは古いシステムにどのように適合させればよいのか、まだ明らかではありません。

外の世界の人がどのように思考し、行動し、振る舞っているかを理解する若い日本人の能力は以前よりずっと高まっています。同じように、日本のビジネスマンは日本以外の会社や社会がどのように動いているか

よく知っています。かつて問題なく動いていたものと、今や破綻の兆候を見てとられている日本との間での現実的な弁証法的課題が存在しています。日本人は今や外の世界がどのように動いているのか、そして一昔前の古い世界とどのように異なるのかをよく知っています。それだからこそ私はひきこもりを日本独特の症候であると思います。

現在われわれが見ているものの多くは、ある意味でかつて問題なく機能していた日本と、他の国が異なるシステムでわれわれを追い越そうとしているという感覚の間の弁証法的緊張です。しかし、日本人はどのように振舞うべきか、どのように対処すべきか、まだ迷っています。

部分的に言えば、これは日本の基本的同質性によります。

アメリカ人はとてつもない異質性が存在している社会で成長します。バスで自分の隣に座る人はラテンアメリカ、ヨーロッパ、スペイン、あるいはアフリカで成長した人かもしれず、それはわかりません。あらゆる肌の色、人種が混ざっています。そしてアメリカでは自分とは異なる人をどのようにして信頼するかを学ばなければなりません。したがって、アメリカ人は実際に見知らぬ人に対して素朴な信頼感を持っています。

しかし、日本では人はすべて同じであると考えられているので、知っている人と知らない人を分けなければなりません。「人を見たら泥棒と思え」という私の好きな言い回しがあります。知っている人でなければ、道ばたで会う人は泥棒かもしれないということです。もしあなたがその人と人間関係を持たないならば、その人には関心を持ちません。そして日本人は知らない人である他人についてどのように考えているか。その人に対しての信頼感はなく、リーダースクリーン上にないという不信感があります。



ワークショップ参加者

後列左から2番目から Tuukka Toivonen、Vinai Norasakkunkit、Michael Zielenziger、Carl Cassegard、前列左から4番目、内田由紀子の各氏

皮肉なことに、日本は同質性が高いことによって信頼性が低くなってしまっている社会です。

この同質性は日本人が世間体の重圧に耐えること、世界が創造性と個性を求める時代に、創造的な「個人」であることを困難にしています。「日本人」を規定する文化的価値をどのように守るか、そして同時に現在の社会が好調で幸せな社会とは言えないことについてなんらかの形での根本的再構築が求められていることを認めること。また、「他人」との深い信頼関係をどのようにして構築するのか、そして根本的な違いをどのように受け入れるか。これらは日本社会に突きつけられている課題です。

これは今後何年もかけて社会学者と市民の両方が考えなければならぬ課題ではないでしょうか。

おわりに

内田由紀子

3氏の話提供と、ジーレンジガー氏による指定討論を受けて、ひきこもりやニートなどの日本の若者を取り巻く「問題」は、はたして社会的に構成されるものなのか、それとも精神状態や心理的な問題なのかについて議論が重ねられた。社会学の立場からは、「問題」の社会的な構成プロセスが指摘され、心理学の立

場からは個々の動機づけに関わる若者の様相について指摘された。しかし社会と心は簡単に切り分けられるものではなく、社会的現実が心の現実になり、そのようにして形成された心がまた社会の現実を再生産するとすれば、この2つのアプローチはそれぞれに重要であり、連携が必要であろう。このワークショップを受けて、心理学の側は社会の変化をどのように捉えるべきか、人々の心に変化をもたらすような社会の構造上の変化はなぜ起きているのか、日本の教育や雇用に関わる経済情勢なども視野に入れて見極める必要があると再認識した。また、社会学の側からは、政策や組織が個人の内的な動機付けにどのように影響するのか、どのようにすれば個々人のモチベーションが高まり、働くことの概念が変化するのかについて取り組む必要があり、そのためには心理学のアプローチと連携して理論構築を行っていくことの重要性が呈示された。

ジーレンジガー氏が指摘するように、日本の社会のシステムも、社会の変化に非常に敏感な若者の心も、従来の価値観とグローバルな価値観の間で迷っているともいえるのかもしれない。日本社会の心を考えていく上でも重要な示唆を受け取った。